



Title	ロベール・ブレッソン考：魂を創発する装置としてのシネマトグラフ
Author(s)	三浦, 光彦
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16974号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16974
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99818
Type	doctoral thesis
File Information	Mitsuhiko_Miura_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：三浦 光彦

	主査	教授	応	雄
審査委員	副査	准教授	川崎	公平
	副査	教授	竹内	修一

学位論文題名

ロベール・ブレッソン考 ― 魂を創発する装置としてのシネマトグラフ

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の主たる研究成果は、ロベール・ブレッソンが映画を独自のタームで名づけた「シネマトグラフ」とは何か、さらにブレッソンの映画を受け取る者が、それを受容あるいは論評する際にいかなる営みをなしているのかという、二つの問題を相互に連動させながら、独自性の高い論考を展開した点にある。

前者の問いに関して、本論文は、ブレッソンの作家性が顕著に現れ始めた『田舎司祭の日記』から、生前最後の監督作品である『ラルジャン』に至るまでの重要作を対象に、ナラティブおよび画面表現に即した具体的な考察を行っている。先行研究を踏まえつつ、計7作品に関する各章の分析はいずれも独自の視点にもとづく緻密さを備えており、学術的発見の新規性と作品分析の精度には目を見張るものがある。作品論においてはとりわけ分析の精度が問われるが、その点で本論文はきわめて高い分析力を示している。たとえば『少女ムシエット』の章では、本作をめぐるドゥルーズとランシエールが提示した、一見相反するように思われる議論を、①「断片的な」イメージがいかに組織されるかという次元と、②リレーをなすナラティブがいかに進行するかという次元の差異として整理し直す。そのうえで、鳥の狩りと少女の「狩り」に見られる類似、ならびに作品全篇にわたる「狩り」の反復とその諸相を、画面分析を通して説得的に論じている。

後者の問いにおいて本論文は、映画理論、哲学、美学、人類学など、人文学の複数分野にまたがる諸理論・言説を詳細に検討しつつ、ロベール・ブレッソンの映画に見られる主題的および表現的事象に即して、具体的かつ理論的に説得力のある議論を重ねている。とりわけ、ジャン＝ピエール・ウダールの「縫合」論やレイモン・ベルールの諸論考を的確に読み解き、緻密に論究することで、受容に関する問いならびに映画論者そのものに関わる問いをめぐる独自の考察を展開しており、本論文の論証に理論的思考の厚みをもたらしている。たとえば、『ジャンヌ・ダルク裁判』が特権的に扱われるウダールの「縫合」をめぐる議論において、本論文は、ラカン派精神分析と映画理論の関係およびその変遷に関する文献や、絵画論を含む現代表象理論を幅広く参照している。そ

うした検討から得られた理論的着想を、当該作品のシークエンスを構成するショット群がいかに組織されているかという問題に関する具体的分析と緊密に連動させ、装置としての「シネマトグラフ」においては、制作の段階にすでに受容の次元が織り込まれており、作品を受け取る者における能動的主体性が生起しうる契機が作中に内包されていることを力強く論じている。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、本論文が上述の諸方面において充実した研究成果を上げていると評価する。一方、本論文に残されている改善すべき点についても指摘した。

本論文では、ロベール・ブレッソンの制作した7作品がそれぞれ独立した章を設けて論じられているが、同監督のフィルモグラフィの中でも重要な作品である『白夜』および『湖のランスロ』が研究対象から外されている。これらの作品を対象から除外した理由や、その選定方針について、執筆者による補足的な説明が望まれる。

また、本論文では複数の現代思想および映画理論のテキストについて詳細な検討が行われているが、援用された理論テキストの中には難解なものも含まれており、論証の過程において議論が錯綜する箇所が見受けられた。さらに、文中で使用されている複数の理論用語についても、意味範囲が相互に重なり合うものが見られるため、諸用語をより明晰なかたちで整理・統合することが望ましい。

しかしながら、これらの問題点は、本論文の学術的価値を損なうものではないと審査委員会は判断する。本論文のおよそ半分を占める複数の章は、二本の全国学会誌掲載論文を含む既発表の学術論文、ならびに学会における研究発表を基に執筆されており、研究の独創性および学術的妥当性は十分に確認できる。また、口頭試問において、上述の諸点について指摘を受けた学位申請者は、本研究課題の今後の展開に向け、さらなる完成度を目指して改善を重ねていく意欲を明確に示した。以上を踏まえ、審査委員会は、本論文が到達した学術的水準、ならびに論証過程において示された学位申請者の高度な研究能力を高く評価し、全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。